

2010年 **GNOBLE** 4期生

慶應・東京医科歯科 医学部合格者ロングインタビュー

菊岡	吉朗	(きくおか よしろう)	巣鴨→慶應 (医)
竹田	将人	(たけだ まさと)	筑駒→慶應 (医)
密田	清夏	(みつだ さやか)	桜蔭→東京医科歯科 (医)
山本	啓喜	(やまもと ひろき)	筑駒→慶應 (医)

Q :いつごろ、どんな理由で医学部を目指しました？

竹田：明確に志したのは高1か、高2くらいです。父親が医者なので医学は身近に感じていたのですが、他の道もいろいろ考えた末、やはり自分もこの道に進もうと決めました。



山本：僕の場合、慶應の医学部と東大の理Ⅰに合格し、最後の最後になってすごく迷いました。

東大の振込期限までの3日間は、理Ⅰに進んで物理学をやるのと、慶應に行って医学をやるのと、結局自分は何がやりたいのか真剣に考え抜いて慶應の医学部を選びました。



密田：私の場合、幼い頃から少し勉強ができると医者か弁護士みたいに言われていて、「絶対なりたくない！」と思っていたんですけど、中2で入院することになって、その時からお医者様の仕事に憧れを持ちはじめました。でも、高3の秋になってもまだ、東大の他の学部を選ぶか、医学部を選ぶかは迷いました。東大生になりたい気持ちもあったのですが、東大に入った場合の将来像みたいなものは浮かんで来ませんでした。

一方、どんどん進歩する医学知識を学びながら医療活動に従事して行くことにはとても魅力を感じました。



菊岡：僕は数学が得意だったので数学科を考えていた時期もありました。でも、幅広く学ぶ必要のある医学分野により惹かれるものを感じて決めました。



Q : 医師になる、という気持ちはすでにありますか？

山本：まだ固まっていません。ぜんぜん実感がわいていないというのが正直なところです。

密田：まだこれからだと思います。自分が思い描く医師になるには、まだまだこれから一步一步積み上げなくては、と考えています。

菊岡：やっぱり僕も、これから勉強を積み重ねていけば医師にはなれるかもしれませんが、どんな医師を目指していくかは、これからのことだと思います。

竹田：僕の場合、一昨日入学式に出てから、これまで以上に医者を目指す気持ちが強くなっているところです。先輩からもいろいろな話を聞いて、ますます気持ちが向かってきています。

Q : 医師に求められるものは多くあると思いますが？

竹田：社会貢献という気持ちも含めて勉強していきたいと思っています。実際にはいろいろなことがこれからなのですが、すごく志の高い学部だなとは感じています。その中でも慶應の医学部で学べることを幸せに思っています。

密田：私が入院していたとき、隣のおばあさんが毎日泣いていたんです。私は子どもでしたから毎日親が見舞いに来ますが、おばあさんのところにはどなたも来られなくて、寂しいんですね。で、夜中にもナースコールをしょっちゅう押すんです。どこか調子が悪いというわけではなく、お喋りがしたいだけなんです。でも看護師さんもお忙しくてそうそう相手をしてくれるわけでもありません。そんなことを見ていて、自分が医療スタッフ側ならそういう場合どう対応するだろうとか、今になって考えたりしています。

山本：医者って大変な重労働だと思います。頭を使うだけじゃなくて人一倍体力もなくてはいけないだろうし。その上、ある種の自己犠牲のようなものも求められると思います。それを考えるとまだまだ胸を張って医者になります、とは言えないんです。でも先輩の話聞いていて、必ずしもみんながみんな最初から自覚ができていたわけでもないようなんです。おそらくこれからの大学生活の中でいろいろ

と気持ちの変化があるんじゃないかと思います。

菊岡：僕も明確に求められるもの、というか、自分が身につけなくてはいけないものがどんなものかはまだよく分かりませんが、医者の方々の果たす役割が大変になるほど「それこそ望むところ！」という気持ちはあるんです。たとえば、地震や洪水など大変な災害にあった国に率先してボランティアとして駆けつけたいと考えるりもしています。

Q：苦手教科と得意教科は何でしたか？

密田：苦手科目は英語です。中学時代に別の塾に通っていたのですが、入院してまったく分からなくなってしまうと、それからは自分でやろうと思っていたんです。でもやっぱりうまくいかないまま、高2になってしまい、どうしようと悩んでいました。そうしたら、友だちがグノーブルを教えてくれて、何とか医科歯科に合格できるところまで伸ばせました。得意科目は現国です。好きなのは数学や理科

ですが「得意科目は？」と聞かれたら、点数的にも現国です。

菊岡：僕も英語が苦手でした。別に広告するわけじゃないですけど、高2でグノーブルに来てから一番得意だった数学とタメを張れるくらいの科目になって、受験では相当強みになりました。

竹田：高2までは英語が苦手でしたが、僕もお世辞で言うわけじゃありませんが、中山先生に教わって英語に対する考えかたが大きく変わりました。それは、英語はあくまでも一つの言語で、情報や考えなどを伝え合う大切な便利な道具だということです。それまでは英語を受験科目の一つとして考えていたのですが、グノーブルに来てから言葉としての本質がとらえられるようになったというか…考え方が根本から変わって、高3になってから本当に出来るようになりました。

特別得意な科目というのはありませんでした。全体的に平均的な点数だったかなと思います。英語で点数がとれるようになって苦手をなく

したということになります。

山本：僕もやっぱり苦手は英語でした。以前行ってた塾で結構必死に勉強したんです。単語とかも1週間に150語以上を5回ずつ書いて覚えていくというのをがんばってやったのに、ぜんぜん伸びなくて、「このやり方じゃまずいな」ということでグノーブルに変えたんです。グノーブルに来てからは正直言って英語の勉強量は減りました。勉強量は減ったけど英語が好きになったので勉強に前向きになれたし、英文を読むこと自体が楽しくなったし、どんどん知識が入ってくるようになりました。僕が困っているところを中山先生はよく分かってくださって「こうすればいいんだよ、こう考えればいいんだよ」って具体的にアドバイスしてくれて、それで一気に伸びました。以前のようにガチガチに勉強しなくても点数が取れるようになって、英文を読むのが楽しくて、最後の方は学校の数学の授業中も英語を読んでいたこともありました(笑)。

得意科目は物理です。物理はかなり自信もあ

ったし点数も良かったですね。

Q :グノーブルの存在をどこで知ったのでしょうか？

菊岡：友人の紹介です。高校の友人がグノーブルに来ていて。

竹田：僕も学校の友達からの口コミです。

山本：僕もです。

密田：私も同じです。

山本：グノーブルに通っている友達から、1ヶ月くらいで英文がすらすら読めるようになるって言われたんです。最初は信じてませんでしたけど(笑)、このままじゃもうどうにもならないと感じていたし、それに別の人からも中山先生が素晴らしいと聞いて、ここはひとつグノーブルに賭けてみようと思いました。

Q :グノーブルではなぜ英語を伸ばせたのでしょうか？

山本：以前の塾とグノーブルの違いはありすぎて言い切れませんが、なにしろ、前のところは授業がつまらないんです。ただ板書を写し、単語もただ覚えさせられてテストされるとい

う繰り返し。文法の説明もただこうだから覚えなさいと。授業中は時計を見ては「まだ終わらないのか」とため息ばかりついていました。はっきり言えば親には申し訳ないけれど授業料を捨てているようなものでした。ただ、みんな行ってるから行くという感じだったんです。

グノーブルは全てが違いました。英語の発想を教えていただけるので文法もすんなり理解できたし、単語の語源からの説明は興味深いだけでなく特に暗記しようとしなくても、いろんな単語がつながって自然に語彙が増やせたとし、音声教材を使って音読しながらの復習で英語への抵抗がなくなるとし、何より、英文を前から読みこなしていくという当たり前のアプローチが身に付いて速読できるようになり、そのおかげで、内容をより深く考えられるようになりました。

竹田：他の塾は機械的で深みがなかったんです。熟語とかもそのままの暗記だったので、ちょっと書き方が変わっていると意味がとれなかつ

ったし、「こんな熟語ないよ」って腹が立つぐらいだったんです。

グノーブルでは前置詞の意味から教えてもらえて、型どおりじゃなくても読めるようになったし、何より、文章の背景的情報や、その文の深い内容も教えてくれるので、書いた人の考え方や主張をよく理解できるようになりました。他の塾では英文の構造をとって「こう訳すのが正しい」で終わりです。こうした教わり方って実は致命的だと思います。

文を読むのは新しい情報や考え方に触れるためなのに、文法的正確さが分かたらおしまいというのは変です。文法的に正しく読めるというのも、語順のままでは意味がないし、書いてある内容が理解できなければいくら文構造が理解できても、それって表面的にしかわかってないことになりますよね。

グノーブルに来てみて初めて、グノーブルの評判が良い理由がよく分かりました。

密田：グノーブルの英語はまず文章自体が面白いから授業が退屈ということはありません。た

たとえば去年の夏前に盲目のピアニストが国際的なピアノコンクールで優勝しましたよね。そうしたら、その次の週にはそれが問題文になっていたんです。受験英語を勉強しに行くと考えると嫌なんです、「次はどんな文章なんだろう」と楽しみに思えたり、新聞で見出ししか見てなかった情報を英語で読めると思うと何だかかっこいいって思えて、英語嫌いの私ですら自然に勉強に向かえたんです。それから、グノーブルの先生方には「教えてやってる」という上から目線はまったくなくて、先生方はいつも「一緒に頑張ろう！」という感じで向き合ってくださいるんです。それから、私は秋好先生に習っていましたが、先生はとてもお忙しいのに一人一人に本当に親身でした。私の場合も直前期に医科歯科の問題を8年分解いて、それをすべて秋好先生に見ていただき添削していただきました。わざわざワープロで詳しく解答・解説を打ってくださいったり、「君はこんな風に考えたから間違えちゃったんだよ」ってことまでアドバイス

してくださったりで、とても感謝しています。

山本：そういうことは他の塾では皆無ですね。僕も本原先生に過去問の添削を直前までやってもらって相当お世話になりました。生徒と先生のつながりがかなり深い塾です。

密田：先生はすぐ顔と名前を覚えてくださるので質問にも行きやすいし、分からなかったらすぐ聞ける雰囲気づくりとかも、とても上手な塾だったと思います。

Q：こうだったら良かったのと思うことは？

菊岡：不満はゼロです。まったくありません。何か不満があるのなら教えて欲しいくらいです。授業はいつも要約で始まるので最初は東大中心かと思っていましたが、慶應医学部対策もしっかりされていて本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

山本：僕も全くないんですけど、あえて探すなら、休憩がないのがちょっと辛かったかも(笑)。毎回延長授業で長かったのです。でも、それも考えようによってはお得だし、先生たちも本

当に熱心に指導してくださったので、そこが不満って言ったら申し訳ないです。

竹田：はっきり、ないです。

Q：小論文や面接は？

菊岡：慶應の小論文は「カラマーゾフの兄弟」でした。

山本：「人類を愛すれば愛するほど、個人を愛せなくなる」と言っている医者の方の考えていることとをまとめよというのと、その医者にあなたが言葉をかけるとしたらどんな言葉をかけるか、それを50分で書けというものだけ。

菊岡：僕の場合、対策は特にはしてなかったせいかな、50分は短かったですね。書きたいことはすぐに漠然と浮かんだんですけど、それを言葉にしていくのに時間が足りなくて。

山本：一応慶應の過去問はチェックしていましたが、例年対処しにくい問題ばかりという印象でした。

竹田：本番でも問題を開いた瞬間、「今年も変なの来た～」と思いましたね。小論文はその人の

人生観とか問われているので簡単には鍛えられるものじゃないと思います。

山本：出題意図を読み取って、求められている答えを書けばいいかなと考えて、「医師を志すものとして」というのを前提として文を書きました。

菊岡：僕は、ずばり本音というか、今の自分で考えられることをそのまま書きました。

密田：医科歯科の面接は、医科歯科に入りたい理由と、医学部に入りたい理由、中高でやっていたクラブのこと、合格が出ているのはどの大学か、そして受験が終わったら何をしたいか、最近見た映画は何かなど、結構たくさん聞かれました。で、「最後に状況判断の問題です」、と言われ、今あなたはこれこれこうした状況にありますけどどう対処しますか、といった、何が答えなのか分からないようなことを聞かれて、その場で思ったままを答えました。

竹田：慶應は予め調査書みたいなものを書いて、それをベースに聞かれるので、突拍子もない質問が飛んでくるということはありませんでした。

ね。ただ、僕は途中で「逆立ちしてみて」なんて言われました。特技に逆立ちって書いたんです。でもさすがに場所も狭いから止めようかということになりやりはしませんでしたけど。そんな感じでかなりフレンドリーではありますね。

山本：面接官って教授だけでなく、医学部以外の普通の先生みたいな人もたくさんいるので医学部ならではの質問、たとえば脳死についてどう考えるかなどというものはなかったです。

菊岡：僕の場合は人と接する時に大事なことは何ですかとか。

竹田：あと受験番号が早いほうが絶対に得です。というのも、面接は受験番号順に呼ばれるので、遅い人はものすごく待たされる。小論文と同じ日にやるのですが、朝早くから小論文を書いて、遅い人だと夕方の6時くらいまでかかる。待ってる間にだれてしまいうし、その間に余計なことを考えて疲れてしまいます。

山本：あと見栄を張らずに正直に言ったほうがいいです。「好きな本は何ですか？」と聞かれて、

僕は調子に乗って「福岡伸一の『生物と無生物のあいだ』です」と答えたんですけど、実は途中までしか読んでなかったんです。深く聞かれたらどうしようって冷や汗かきました。

竹田：僕は1日前に最近読んだ本のことを聞かれたらまずいなと思って、あわてて新渡戸稲造の『武士道』を読み始めたんですけど、当日になって「詳しく聞かれたらどうしよう」と怖くなり、本当に愛読していたシャーロック・ホームズのシリーズと正直に答えました。やはり素直が一番です。

密田：面接は、ある程度は質問を想定して用意していった方がいいと思います。たとえば志望理由とかです。私は幾つか志望理由があった中の1つだけ答えたんですけど、「それだけ？」と聞かれ、それ以外についても話しました。浅くしか考えていないと深く聞かれると詰まってしまうと思います。事実、「そんなことで詰まってしまって患者さんに接することができるの？」と言われた人もいたようです。

Q : 医学部を目指す後輩たちにアドバイスを。

菊岡 : いい塾を選ぶということ。それから模試の結果よりは志望する学校との相性を信じることです。行きたくはないけれどA判定の学校よりも、C判定だけに行きたいと思う学校を選んだほうが絶対いい。僕はそう思います。

密田 : 勉強は無理やりやるよりも楽しんでやるべきです。それと塾の授業でやったことは徹底的に復習すべきだと思います。不安になると新しい問題集に手を出したくなってしまうんですけど、そこは我慢して一度やったことを完全に自分のものにするために復習を重視した勉強をすべきだと思います。

山本 : 睡眠時間を削って長時間ぶっ続けで勉強するという人がいますが、僕はそれはあまり意味がないと思います。それよりもちゃんと睡眠をとってやる時は思いっきり集中してやるという方がいいと思います。僕は1時間から2時間くらいしか集中力が続かないと自分で分かっていたので、2時間やったら一休みしてまた2時間と決めていて、その間は本当に

集中して取り組みました。あと、英語についてはグノーブルのプリントを徹底的に復習することが大事だと思います。グノーブルと言われる勉強法と教材は、本当に英語力を上げる切り札です。

竹田：受験前になればやるしかないんです。それより、時間があるうちに苦手なところを嫌わずに克服することが大事だと思います。僕の学校みたいに直前まで忙しく行事がある場合は、それを見越して苦手科目をつぶしておくことが大切です。苦手意識のない科目は、直前期でも問題に当たればその分実力を上げられますけど、苦手科目はどうしようもないですから。

それから、英語の授業中、中山先生からいつ当てられるか分からないのでみんな結構緊張してると思うんですけど、僕はあるときからあえて挑んでました(笑)。難しい質問のときに答えが分かったかも思ったら、さりげないそぶりをするんです。そうすると先生が目ざとく見つけてくれて当ててくれるんです。正

解だったら「よっしゃ〜」って感じで。

山本：その手は僕も使ったことがあります(笑)。

竹田：僕は体育祭でも文化祭でも忙しくて、授業に出られないこともかなりありましたから、見捨てられても仕方なかったんですけど、先生はそんな僕もずっと見守ってくれました。文化祭が終わって最初に行った授業の添削物にもコメントしてくれて、先生のためにも絶対頑張って受かりたいって思いました。こんな風に先生たちとの信頼関係が築ける塾ってグローバルだけだって、学校の友達もみんな言っていました。こういう環境を活かしていくのがいいと思います。

(2010年4月4日)

グローバル新宿本館にて

